

愛慕心唱

藤田徳太郎

妹がふみけふも來らず庭に散れる梧桐の枯葉
を見盡しにけり

久方の天おしてれる月はあれどわがいぶせさ
はうちはれぬかも

まぢまちてこよひわが手に得てしかも妹がま
さでに書ける手紙を

しばらくは封を切り得ず眞愛まなしき妹が名まへ
に見入りたりけり

満月の夜に

天なるや月は妹かもつくづくと眼には相見て
手に取られなくに

相思はぬものにしもあらず或る時は妹がひと
みの我にありけり

この夕べおちゐて聞けばほそぼそと虫の聲す
も秋近みかも

たまたま病みこやせるに近きあたりに住みし年若く顔よき乙女

の毒のみて死にきと聞きてよめる

二つなき命にあるを愚^{しれ}人^{びと}のわぎもは棄^うて、逝
きにけるかも

工^{たくみ}らがうつ墨綱の一筋に世をはかなみと死に
かゆきけん

若草の戀にしなへて逝きしかも若きわぎもの
心^{こゝろ}知らましを